

公共サービスには住民の暮らしを守るという使命・目的があるが、その原資の足しにするはずだった地方競馬の赤字化が止まらない。

全国共通の問題だが、本県ではその本来目的におよそ似つかわしくない競馬場がバブル後に完成し、その投資が負の遺産となっている。

また、私がかかわっている企業経営の場面で、私が尊敬する在野の大先輩方によると、当時決定権を握っていたのが天

# いわての風

は、形から入ってしまい、いつまでたっても中身が充実しない経営者もいる。

下りの役人のOBで、その感覚は気前の良い虚業家のようだったという。事業の元手は自己責任で集め、その使い道についても吟味を重ねるとい

「売上げのメドも立たないのに不様なオフィスを構えたり、仕事時間を削ってまで事業と無関係な名譽職にうつつをぬかしたり、いわゆる「ええカッコしい」のタイプだ。

こうした体たらくは、本来の目的を忘れ、いつ

ましてや、公金を原資にするのであれば、なおさら誠実でなければなら

## 「カッコつけ」百害あって一利なし



関 洋一 一関市・企業世話人

### 真摯さこそ成功の鍵

せき・よついち 52年紫波町生まれ。東京理科大学。商社勤務。誘致企業取締役。県中小企業支援センター・プロジェクトマネジャーなどを経て現在は中小企業大学校・高知工科大学大学院講師、盛岡市創業支援マネジャーなど。

でも、食品会社の肉種偽装や賞味期限の「まかしが発覚するなど、いろいろな分野で不誠実な事象が続発している。

この情けない世相の一因として、あらゆる場面での二世や三世の跋扈という現象がある。人にもよるが、彼らの言動には軽薄さのみが目につき、

その親や祖父母らが元来持っていたであろう使命の力ケラすら感じられないことが多い。

逆になこと)がある。と、ごう慢で高圧的なり、他への畏敬の念も持たずに独善に陥るから、部下の協力などおぼつかない。

当然、事業家の場合も自らの思いに「真摯」であることが、事業の成功につながるわけだ。

折しも中央政界では、短期間に問題大臣がコロコロ代わった揚げ句、トップが所信表明直後に突如辞任した。また産業界

「ドラッカーの著書にある。彼は、上に立つ者の資質として「真摯さは、絶対外されない」とし、さらに「真摯さは、とってつけるわけにはいかない。まかしがきかない。上役の無知や無能や頼りなさなどには部下は寛大たりうるが、真摯さの欠如を部下は決して許さない」と著している。

確かに、「この人のもとなら、少々のは我慢して頑張ろう」と思わせる人物には、例外なく真摯さ(誠実でひたむき

ないのに、何を勘違いしたのか、虚勢を張ってのなれの果てという側面があったようだ。

二例目の企業経営の場合、底の浅い見えっ張り、すぐに馬脚を現して市場に自然淘汰されるので実害はないが、他山の石として教訓とするのは有用であろう。

そこで、こうした見えやカッコつけは百害あって一利なしだということ

その一つのヒントが、二年前に亡くなった世界的ビジネス思想家P・F

今、の岩手に生きるわれわれは、先達がはぐくんできたこうした優れた風土を大きな地域資源として、特に人材面に丹念に生かしたいものと、つくづく思う。